

## 第42回「気象予報士について」

読者の皆様、こんにちは。航空気象群ホームページ「気象の社」にお越しいただきありがとうございます。今回は春日気象隊から、皆様がテレビ等でよく見かける「気象予報士」をテーマにお送りします。

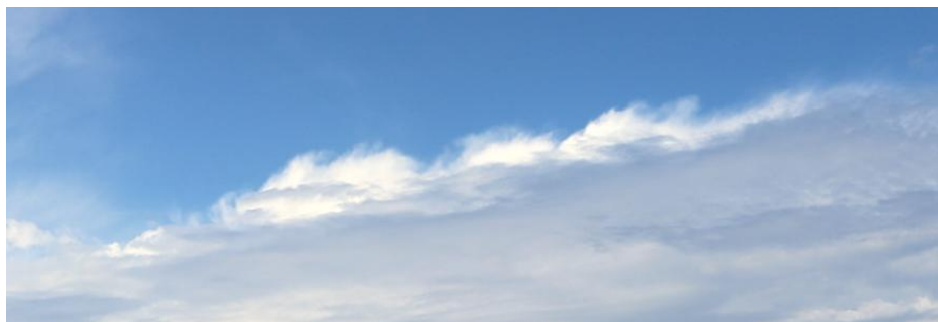
### ○気象予報士とは

皆様がよく目にする気象予報士の姿は、テレビ等を通してお仕事をされているお天気キャスターが多いと思います。

他にも、気象庁、地方自治体、民間企業及び放送局、そして私たち自衛隊等、多くの場所で気象予報士が働いています。また天気予報の発表は明治時代から始まっていますが、気象予報士制度は平成6年から導入されておりその歴史はまだ浅いです。

予報士制度は、気象予報の信頼性を補うために、気象庁から提供される予測データを適切に利用できる技術者を確保することを目的として創設されたのが始まりです。現在、全国には12571名の方が気象予報士として登録されており、(※気象庁HP令和7年4月30日現在)約3000名余の気象予報士が(一般社団法人)日本気象予報士会の会員として、気象技術の研鑽、安全知識の普及啓発や気象情報による社会貢献活動を実施しています。

私たち航空気象群も、航空自衛隊の運用する航空機を安全かつ円滑に運航させるため、「気象のスペシャリスト」が気象情報等の提供を日々実施しています。



### ○気象予報士の仕事とは

主な仕事は天気を予測し、その結果を予報として提供することです。

天気は常に変化するため、100%完全に当たる天気予報は存在しません。しかし、多くの気象データ(天気、気温、降水確率等)や数

値予報資料を解析し、分析することで高い予報精度を保ち、天気を予報することが気象予報士の仕事です。テレビやラジオ等のメディアによる天気予報のニュースや解説、気象庁職員による気象災害における被害を最小限にするための分析や情報提供を適宜適切に実施しています。また気象庁の委託により、各都道府県には気象防災アドバイザーが防災対応を実施しています。各地方の気象災害における被害極限のためのアドバイスや啓発活動及び人材育成に取り組み、気象庁と連携し防災の向上に貢献しています。

私たち航空気象群も全国に気象隊員を配置し、観測・予報・整備技術を活用し、身近に迫る自然災害やめまぐるしく変化する自然環境に対応しながら、日本の空の安全を守っています。



○気象予報士になるためには

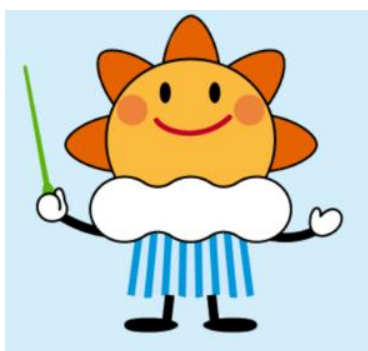
気象予報士として仕事をするためには、難関の国家試験に合格しなければなりません。(合格率は約5%)

気象予報士試験は日本の国家試験の1つであり、気象庁以外の者に対する予報業務の許可や予報業務の技術水準及び信頼性を補足するため、気象予報担当者の技能試験として制定されました。平成6年8月28日に第1回の試験が行われたことが「気象予報士の日」として記念日になっています。気象予報士試験は1年に2回(冬:1月、夏:8月)実施されます。

試験内容は学科試験(一般知識及び専門知識)と実技試験があり、予報士試験合格後に気象庁長官へ登録申請を実施することで、気象予報士になることができます。また防衛省では、「業務経歴による免除に関する養成課程の修了」と「一定期間の気象業務に関する業務経歴」これらの条件を満たすことで、予報士試験のうち学科試験が免除となります。気象予報士試験は幅の広い専門的知識が必要であり、まさに「気象のプロフェッショナル」と言えます。

## ○最後に

今回は「気象予報士」についてお話をさせていただきましたが、生活に関する気象、航空機に関する気象等はとても予測が難しく、自然現象の未来を読み解くことはとても困難です。しかし、多くの資料を活用し、最新の技術により天気を精度よく予報することが可能となりました。最近の天気予報は「当たる」と感じる人も多いのではないのでしょうか。たまには、ゆっくり空を眺め、自分なりの天気予報を試してみても面白いと思います。もしかしたら、未来の「気象予報士」が生まれるかもしれませんね。



晴守り



気象庁 HPより

出典：気象庁ホームページ